

学びの創造

当センターが「教育実践研究支援センター」となり2年目を迎えました。同時に「まなびの総合エリア」プロジェクトも2年目に入り、展開の年を迎えます。当センターは、今後も大学と教育現場をつなぐことを目指して活動していきます。今年度もこのセンターニュースを通してさまざまな情報を発信していきますのでよろしくお願いいたします。

★こころのケアチーム：臨床心理士としての被災地派遣

〔東日本大震災の発生と同時に、様々な緊急支援チームが被災地に入り、現在も支援活動が続けられています。当センター教育臨床研究部門の北島正人講師は、震災後1ヶ月経った4月中旬、こころのケア・チームの一員として岩手県宮古市に派遣されました。以下はその活動報告です。〕



被災地では、精神科医2名、保健師1名、そして県から派遣されたロジスティックス（兵站・運転手などの後方支援スタッフ）1名と計5名で活動した。

肉眼で見る現地、宮古市は、テレビ映像をはるかに上回る悲惨さである。我々よりも現地の風景や地形を知る地元の人にとっては、さらに強い目撃のトラウマ（心の傷）にもなり得る。そんな中でできるのは、家族や大切な人を亡くして不眠や悲嘆反応を呈する人、自分の家族の安否さえ分からない中で市民の支援をしてきた地元保健師や医療機関のスタッフを、臨床心理学的な手段でそっと援助することぐらいである。



校庭に置かれた重機

今年の3月11日、秋田に断水と停電をもたらした地震が、実は東北を中心とする日本の国土をひどく破壊し、多くの民の命を奪い去ったことを知ったのは夜が明けた頃だった。

この災害が東日本大震災と命名された数日後、国から県を通じて「こころのケア・チーム」の派遣要請がなされることとなった。私は秋田大学病院精神科で編成されるチームの1つに臨床心理士として参加することとなった。派遣はちょうど震災から1ヵ月後となる4月10日からの4日間。参加機関数を多く確保すること、支援スタッフの心身の健康維持を含めるとこの4日間が標準的な支援活動の日数となる。



紙面の都合で詳細は記せないが、十分なお役目を果たせたという充実感は一切なく、むしろ後ろ髪を引かれる思いで現地を後にした。今は再び被災地に赴く機会が来るまでは、秋田にしながら支援に携われることを続けていこうと思う。そして、そういった志を持つ人を多く見つけ、支援の輪を広げていくことも自分にできることの一つだと考えている。

〔北島正人〕

★日本ブリーフサイコセラピー学会第21回大会が秋田市で開催されます

11月3日から5日までの3日間、日本ブリーフサイコセラピー学会第21回大会が秋田県総合保健センターとカレッジプラザを会場に開催されます。教育臨床研究部門の教員3名をはじめとするメンバーが大会準備委員会に携わっています。

ブリーフサイコセラピーは、より短期間に効率的な援助を志向する心理療法を総称した言葉です。今大会は、「命（ライフサイクル）をつむぐ」をテーマに、人生の様々な段階におけるブリーフサイコセラピーの果たす役割を考えます。一般演題に加え、各発達段階に分かれたブリーフサイコセラピーのワークショップ、いのちに関するシンポジウム、ブリーフサイコセラピーの震災に果たす役割を考えるシンポジウム等を開催します。詳しくは大会ホームページ、<http://www.2011akita.jabp.jp/> をご覧ください。